

持続可能な開発目標として「森の長城プロジェクト」が提案できること

国際会議で注目された「鎮守の森」の森づくり

高橋知明

公益財団法人瓦礫を活かす森の長城プロジェクト事務局・瀬田玉川神社檀宣

去る九月八日、九日の二日間の日程で、英国・ブリュッセルで開催された「国連開発計画」(UNDP)と「宗教的環境保護同盟」(ARCC)が共催する会議に招かれ、「公益財団法人瓦礫を活かす森の長城プロジェクト」の活動について発表した。

ARCCとは、昭和六十一年に英国王室のフィリップ王配殿下の呼びかけでイタリアのアッシジで仏教、キリスト教、ヒンドゥー、イスラム、ユダヤ教の五宗教が集まり環境問題に関する会合を持ったのを契機に、平成七年に新たに四つの宗教を加え設立された。現在では、神道も加わり十二の宗教が加盟している。国連は、人口爆発・経済格差・水食糧不足・人種や男女の差別・教育問題・環境問題など世界が抱える課題への取り組みを含めた「持続可能な開発目標(SDGs)」



英国で開催された国連開発計画・宗教的環境保護同盟共催の国際会議。左端が筆者

の策定に向けて、宗教がSDGsに与える可能性について、ARCCと連携した取り組みをしている。

この会議に招かれたきっかけは、去る五月二十二日から二十四日、福岡県宗像市で開催された「第2回宗像国際環境1

クトの活動について紹介した(活動の詳細は、本誌平成二十四年十月号参照)。
また、この活動はまさに「鎮守の森」をモデルとした森づくりであり、技術的にも低コストで環境に優しく千年以上も森として持続が可能であり、この森づくりの提唱者である森の長城プロジェクト副理事長・宮脇昭横浜国立大学名誉教授の考えは、日本の伝統文化や叡智の上に築かれていることを説明した。

この発表に対して、多くの参加者から感想や意見が寄せられた。インドの参加者からは、海岸線のマングローブが津波から人々を守った事例があったこと、またアフリカの参加者からは、生活上森林伐採は止むを得ないという意見もあったが、それに対して他の参加者から木を伐採したら森に感謝し植樹することもエネルギーの持続に大切との意見も聞かれた。キリスト教やユダヤ教の参加者からは、大きな災害があったにもかかわらず、多くの人達で未来のために植樹することは、とても日本人らしい思想で素晴らしい活動だと有難いお言葉もいただいた。この会議の内容は、九月二十五日にニューヨークの国連本部で開催された「国連持続可能な開発サミット」に報告された。一方で、ブリュッセルでも宗像でも、多



くの海外の方から意見があったのは、コンクリートの巨大防潮堤をはじめ、高台移転や嵩上げ造成などの大規模すぎる工事が、美しかった海岸線の地形を破壊するだけでなく、海川山の幸にも影響することは必至である。持続可能でない事業を進めていることが信じられない、という批判であった。森の長城プロジェクトは、肅々と植樹を進める立場だが、海岸線において関連が深いため、森とコンクリートを比較されることは、どうしても避けられないテーマとなっている。



東日本大震災からの復興事業は、未曾有の災害が起きたことで、原形復旧を前提とした事業が主体になった。

本来、先ず災害法制を変えるなり、特別立法を施行するなりすべきだったが、当時の政府はそれができず、東北の各沿岸自治体は原形復旧の概念のまま、権限と資金を与えられず、新たな街づくりへの意欲を削がれた結果になった。一方で、数兆円規模の莫大な復興予算を消化するため、次々と大規模工事が始まった。経験したことのない規模のため、当然多くの住民の気持ちは追いつかず、新しい街の姿を想像することすらできなかったことが無関心も招く結果になった。そうした背景もあり、コンクリート巨大防潮堤

00人会議」「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録に向けて活動している)にて、森の長城プロジェクトの活動発表をしたことで、会議に出席していたARCCの関係者よりお声掛けいただいたことによるものである。森の長城プロジェクトは宗教団体ではないが、神職である私が「鎮守の森をモデルとした災害から命を守る森づくり」に携わっていることに関心を持っていただいたようだ。

私の前職である神社本庁の職員とともに臨んだブリュッセルの会議では、国連や宗教関係者だけでなく、世界自然保護基金(WWF)や国連児童基金(UNICEF)など環境保全や教育の活動に携わる国際機関の関係者、仏・独政府の関係者など約百名が参加していた。神社本庁からは、神道の自然観について、人間も山水草木と同様に自然の一部と考え、畏れ敬いつつ共存してきた日本の歴史があり、それが持続可能な未来のために必要な考え方であると説明があった。

これを受けて私から、東日本大震災で発生した瓦礫を鎮魂の想いを込めて資源として活用するとの理念の下、瓦礫の上に盛土をし、その盛土にその土地に本来生育するシイ・タブ・カシ類の常緑広葉樹を中心とした苗木を、多くの人々と植樹して、災害から次世代の命を守る森づくりを行っている、と森の長城プロジェクト

の建設が始まった今になって、住民の反発が激しさを増す地域も多々あるのが復興事業の現実である。

「持続可能な開発社会」の実現には、自然と人間が共存共栄するための適度なパランスの構築をしなければならぬ。一人びとりは、それほど大きなことは出来ないのかもしれないが、できることから取り組むことがとても重要だと国連の会議に出席して感じた。既に悲鳴を上げている地球環境だが、その保全のために技術開発と同時に、もう少し自然を回復するための施策も、日本人の持つ自然観をヒントに進めていくことが必要である。

来年は、東日本大震災から五年目を迎える。震災の記憶が風化を越えて消滅してしまつた人、またあの記憶を忘れてしまいたい人もいる。それが五年という時間だと感じている。

森の長城プロジェクトでは、この節目に鎮魂と希望の想いを込めて、今までの最大となる植樹本数十万人、一万人が参加する植樹祭を、来年五月三十日、宮城県岩沼市で予定している。また他にも、福島県相馬市・南相馬市、岩手県山田町でも植樹祭を予定しており、人々の記憶に刻まれることで、震災の教訓とこの活動が持続していくことを目指している。皆様のなご支援とご参加をお願ひした。 <http://greatforestwall.com/>